談話室

理事 岡田正和先生への追悼

坂田　亮

杏林大学医学部物理学教室　〒181　三鷹市新川 6-20-2

(1991年10月4日　受理)

Our Condolences over the Death of Professor Masakazu OKADA

Makoto SAKATA

Kyorin University, School of Medicine,
Institute of Pysics
6-20-2, Shinkawa, Mitaka-shi, Tokyo 181

(Received October, 4, 1991).

私は，ここで，表面科学会の前会長としてではなく，おもに一友人として，(前)理事岡田正和先生の追悼文を記したい。したがって内容は，葬儀当日，友人ならびに各学協会代表の立場で弔詞を述べさせていただいたときのものを骨子としている。

ついこの間，岡田さんは元気な声で，「4月になれば坂田さんの家の近くへ引っ越して行きますよ。それからは，ご一緒に方々へ行きましょうね。」と，楽しいプランをいろいろと話してくれました。それをどんなにか私達は待ち望んでいたことでしょうか。慶應義塾大学理工学部大学院での非常勤講師になることも，昨年秋に，早々と決まっており，時間割も水曜日の4時限目と決めてありました。私の講義が3時限目ですので，4時限目が終ってからは二人して，処々方々へ出歩く計画にしてありました。もちろんそのとき学会の運営財務面や会員拡充のプランも話し合うことにしてありました。そうしたプランを建てているところへ，岡田さんから電話が入ってきました。「身体検査のため，東京慈恵会医科大学附属病院へ入院します。5月の連休明けには退院します。慶應の大学院での4月からの講義は，それまで休講にしておいてください」と。

元気になり，すぐ，退院されるであろうと思ったことと，検査期間中の見舞い客は，なるべく遠慮してほしいとの寛子夫人からの電話で，私は油断をしておりました。ちょうど4月の15日から21日までの週は，折り悪しく私の義母も重態で緊急入院をし，またその他多くの用務が重なり多忙をきわめ，東工大の宮崎副会長と病院に岡田さんをお訪ねしましたのは，4月22日の月曜日午後4時頃でした。病室にうかがったとき，とても病状が悪く，夫人にお会いしただけで，岡田さんにはお会いできませんでした。その折，ちょうど来ておられた弟さんも病室に入ることができず，弟さんと3人，病院の喫茶室で，病状やそれまでの経過につき話しあいました。容態がおもわしくないことは，他の方々からの電話により，いくらかは承知しておりましたが，夫人との直接の電話ではそれほど悪いというお話でもなかったものですから，あと何日もつのか予測もできないほど悪いとは思ってもみませんでした。また，そう思いたくもありませんでした。宮崎先生とともに，心を残しつつ，夕闇せまる

慶應義塾大学名誉教授，杏林大学教授，前表面科学会会長
この追悼文は，応用物理学会の有機分子・バイオエレクトロニクス分科会誌，2, 3 (1991) p.5 と多く重複しているので，同分科会の許可を得て本文を掲載した。先生の業績の詳しいことは同誌を参照されたい。

故 岡田正和先生

故 岡田正和理事のご略歴

昭和 3年1月	台北に生まれる
20年4月	仙台工業専門学校(現・東北大学工学部)土木工学科入学
24年5月	電気通信省電気通信研究所入所
27年4月	東京理科大学理学部1部化学科入学
31年4月	東京大学理学部物理学科助手
33年4月	雪印乳業(株)技術研究所入所
48年1月	応用物理学会薄膜表面分科会常任幹事
49年1月	広島大学教授(水畜産学部)
53年3月	応用物理学会理事
54年1月	日本表面科学会監査
56年1月	同　理事
60年4月	同　常務理事
平成元年8月	広島大学生物生産学部長事務代理
2年4月	応用物理学会・有機分子バイオエレクトロニクス分科会幹事長
3年3月	広島大学退官
3年4月	東京理科大学教授，慶應義塾大学理工学部非常勤講師

病院をあとにするとき，岡田さんに直接お会いできなかった代りとして「早く元気になって，また一杯やりましょうね」というほどの意味をこめた紙への走り書きを，弟さんに託しました。それが岡田さんと私との間の最後の連絡となりました。

そして，運命の日が，あまりにも早く来てしまいました。お見舞いにあがった翌日の23日午後4時51分には63歳という若さで岡田さんは，他界されてしまったのです。その日，私は2つの学会での理事会に出席をしていまして，私への外部からの連絡の便が悪く，岡田さんの最期には立ちあえませんでした。訃報を聞き，日本表面科学会長としての弔電と，生花を贈りました。その電文は「岡田先生の訃報に接し，痛哭の極み，これにすぐるものはなし。先生のご冥福を心の奥底より祈ります」としました。

亡くなられた後での寛子夫人からのお話で，「坂田先生には，とてもお会いしたがっていました。お会いする機会をつくれませず申し訳ありませんでした」との言葉をお聞きし，まさに切歯扼腕しました。岡田さん自身，死の瞬間まで，よもや死ぬとは，つゆ思ってもみなかったようですが，その岡田さんに，亡くなる前にもう一度お会いしたかった。無念の一言です。しかし，あとでお聞きした話ですが，病人の枕元に電話器があり，寛子夫人としては，私に，岡田さんの病状につき詳しく話をすることができなかったとのことでした。夫人の立場にたてば止むをえなかったことだと思います。

岡田さんとの付き合いは，応用物理学会の薄膜表面分科会以来，日本表面科学会，そして応物学会の有機分子・バイオエレクトロニクス分科会設立当初からいまに至るまでの，ずいぶん永いお付き合いでありました。1年後には当学会を背負っていただきたいなどと思っておりましただけに，訃報を聞いたときの学会役職者の狼狽は一方のものではありませんでした。掛け替えのない人材を一瞬にして失ってしまったのですから。他の学会や応物バイオ分科会でも，同様に大きな混乱を起こしておりました。岡田さんは，子供の頃から生物が好きで，小さいとき泣きながら蟹と戯れていたと御母堂から，通夜の折にお聞きしました。それが長じて，遂に，バイオエレクトロニクス分科会を誕生させ，幹事長になるまでになりました。そして，病の床からも，これからは「バイオ」の時代だから，しっかり頑むよと，後輩の方々を激励されておりました。

岡田さんは，大きな身体と大きな声で，ときには歯に衣を着せず，遠慮会釈なく，正論をはいていました。それを「厳しい人」という人もありましたが，それはまことに清々しく一服の清涼剤を飲む心地でありました。そのことが，ある意味でわれわれの表面科学会を今日まで正しく守り続けてくれた1つの砦でもあったのです。

われわれの会の危機はいくたびかありました。それは草創期，間もなくの，会の運営のあり方についての考え方の違いによるもの。つぎは事務体制や事務所の在り方についてのもの。印刷所や出版社との不調和によるもの。そして当学会が雑誌を年間何号発行しうるかの学会の能力評価の違いによるものなどでありましたが，その都度岡田さんの正論によって援護され，この学会はより良い道をたどってきました。そして，岡田さんの学会における役職としては，創立当初からの監査や理事，常務理事として，企画委員長，出版委員長，会員拡充委員長などの重職をつぎつぎにこなしてこられ，当会への功績はまことに大きなものがありました。

その岡田さんが，特大の骨壺が，はちきれそうになるほどの骨を残して昇天されてしまいました。この正月以来でも何回，岡田さんと飲んだことでしょう。正月の中旬頃，いつものように，突然電話がかかってきて，翌日会うことになりました。場所は吉祥寺の中華料理店でした。たまたま，私の家内の誕生日の夜に重なりましたので，3人で夕食を一緒にしました。そのときの酒の味はいまでも忘れられません。大きな声を出し，肩を張ってさっそうと濶歩する反面，シャイな岡田さんは，そのとき「奥さんの誕生日に私が一緒では悪いのでは…」などと，大きな身体を小さくしながらも，夜遅くまで飲みました。

その岡田さんが，忽然とわれわれの前から幽明境を異にされてしまいました。

悲しみは言葉を失わさせます。言葉を失ったいま，万感の想いをこめて岡田さんに，拙い句を贈ります。

亡き友と
歩みし　この道
花水木

終りに臨み哀惜の念一入。名残は尽きません。これからまさに人生の花盛りという岡田さんの，にわかの逝去を心から悼むとともに，永い間にわたる，われわれへの岡田さんからの深い友情に感謝しつつ筆を擱きます。

岡田さん!!　　とわに　　さようなら。